

不調和のなかの調和：パトリック・ホワイトのフィクションにおける自我の研究

佐藤 渉

1973年にノーベル文学賞を受賞したパトリック・ホワイトは、オーストラリア文学のイコニック的存在である。しかし、彼の「偉大さ」に対する懐疑は、オーストラリアの批評家を中心として現在に至るまで根強く残っている。

本論文ではホワイトが円熟期を迎えた中期から、次第に崩壊の様相を強めていく後期にかけて五つの小説作品を取り上げて、鏡、養子、売春、妊娠・出産、非血縁的家族といった主要なモチーフの発展をたどる。とりわけ登場人物の自己形成過程に焦点を当てて、自己が統合から分散へと向かうパターンをこれらのモチーフとの関連において明らかにする。さらに主人公たちの自己探求が、定式化された国家イメージや社会規範からの逃亡と不可分であることを示す。ホワイトの小説は探求し、分散し続ける個人を描くことによって、一国家、一個人の内部における多様性を浮き彫りにする。

ホワイトの中期作品では、調和を示唆するヴィジョンによって主人公の自己破滅的な衝動が隠蔽されている。『ゆるぎないマンダラ』以降、その小説世界では神への信仰、人類の理性、近代的自我等の枠組みが次々に崩壊し、それにつれて主人公の自己や作品の構成も断片化の様相を強めていく。もはや自己における全人的な調和の探求は影を潜め、むしろ断片化した自己を受け入れることが主題となる。

ホワイトのテクストは、調和と断片化という二極化した衝動に貫かれている。この二重性がホワイト作品の解釈を困難にしてきた一つの要因であるように思われる。一方で『トワイボーン・アフエア』の主人公が象徴するように、規範化を逃れる多義性こそホワイト小説の真髄であるといえる。

ホワイトは植民地として出発した近代オーストラリアの国家アイデンティティの曖昧さと個人のアイデンティティを巧みに重ね合わせて描いたが、同時に一貫して社会から疎外された存在を描くことにより、オーストラリアの国家イメージや男性中心のエートスを異化することに成功した。また、ホワイトの関心は性的マイノリティや独自の身体条件をもつ人びとに及び、均一化された国家イメージから溢れ出す内なる多様性に読者の目を向けさせる。こうした点からホワイトはオーストラリアにおけるポストコロニアル/多文化主義文学の先駆者であるといえることができる。